

龜井勝一郎氏の『大和風物誌』に、西の京あ
たりの農家の白壁の映える夕暮に、白い衣服
を着た朝鮮の老婆をみたとき、われわれの祖
先に出会ったように思われたと、きわめて感
動的な描写があったが、私にとっても実感で
ある。

この特集を読んで、民族というものの、歴史
というものの、そして人間の運命について多く
のものを考えさせられた。そしてこの人たちが、日本の最も伝統的な抒情詩をもってうた
っていることに、短歌についての新しい認識
をかきたてられた。この人たちが、短歌を選
ぶことが、究極の表現行為としていいかどう
かということは、大きな問題で私としては今
直ぐなんともいえないが、リカ・キヨシの感
動にみちた作品を読んでいると、そういうこ
とを忘れさせて、たしかなものを受けとめる
ことができる。それだけ短歌は罪ふかいもの
といえるかもしれないが、リルケやエリオッ
トにしても、植民地的な色彩の濃い地方から
出てきたものではなかったかと思う。もち論、
こんにちでは、日本と朝鮮のかかわりは、一
人の内部にあっても生まやましいものではな
いが、短歌のすぐれた要素が現代においても
あるとするなら、リカ・キヨシ氏などが、か

動乱したことであるわい」および「しいて、
くどく説明すれば涙に濡れる。なんと悲しい
ことではありましよう」ということですが、
という解釈がついており、さらに「つまり、
なぞなぞみたいに作ればいいですね、和歌
は」という、それこそなぞなぞみたいな短歌
の氾濫している現在の歌壇に、きわめて痛烈
な皮肉として響くような一句が添えられてい
る。

もともと深沢七郎の小説は「(型)」の文学だ
といっている。処女作『極山節考』は、いう
までもなく姥捨伝説をパターンにしており、
伝説とは総じて「(型)」の上に成り立つもの
だ。『東北の神武たち』が現代青年の、『笛吹川』
が戦国の世における庶民の、それぞれの「(型)」
を美事に描き出していることもいうまでもな
い。しかもその内容を支える構成と文体に
も、明らかな「(型)」が認められるのである。
その意味で、深沢七郎の小説は、ジャンルの
相違にもかかわらず、きわめて短歌と近似し
た性格を持っているのである。

こんどの『風流夢譚』においても、その文
体には、たとえ「私が変だと思ふのは——
どうしたことだろう」という部分が、全体で

えって敏感に探りあてて逃さないのではない
かと思うのである。短歌によって、日本と朝
鮮の理解をふかめる、といったことを私は少
しも考えないのである。従ってこの三十首
も、素材の特異さははなれてみようとしてと
める。こうしたテーマを書きながらも概念的に
ならず、具象的であり、しかも変化に富んだ
構成で巾の広い立体的な盛り上げがなされて
いるのは、長い習練と、体験の量を裏書きす
る。もちろん自己の運命をこれほど歴史と現
実のなかで強調していないながら、詩的オリジナ

■深沢七郎『風流夢譚』のなげたもの

山本成雄

深沢七郎の小説『風流夢譚』(中央公論十
二月号)が、文壇といわず、一種の社会的事
件として、たいへん話題を呼んでいる。文学
としての評価については、賛否さまざまだ
が、それよりも文学以上の素材と作者の意表
をついた道化ぶりが問題になった嫌いがある。
その道化ぶりに大きな効果を添えている
ものとして、天皇・皇后・皇太子・同妃の辭

九個所にも亘って反覆されていることから
判るように、やはり一種の「(型)」の支配が認
められる。だがその内容は、作者自身「夢
譚」とことわっている通り、ことごとく人の
意表をついている。その意表をついた道化ぶ
りに、一層の生彩をあたえるものとして、
「(型)」の文学ともいえる和歌を持ち出して
るのである。そこに作者の意図せぬ(意図し
たかもしれぬが——)皮肉がただよって
いる。

これを皮肉として、嘲笑の氣息を感じとれ
ぬほど、歌人がお人好しだとは思わぬし、ま
して和歌が、こうして小説の中で重大な?
位置を占めるような取り扱いを受けているこ
とによって、短歌の未来に希望をつなぐよう
な、お目出たい歌人もあるまいが、深沢七郎
が、「(型)」の破壊、革命を描き出すのに、や
はり「(型)」に従った文体を採用せねばならな
かったところに、現代短歌の苦悶をそのまま
伝えていようと思いがする。

だが、あまり深く考えすぎることは、作者
のねらった効果に、うまく引掛ることにもな
らう。所詮この『風流夢譚』は、「(型)」とい
うにも備せぬ、一種のパロディなのであ
る。革命に対するパロディであり、また短歌

リティとして出ていない感みはのこるが、今
の場合、ないものねだりというべきかもしれ
ない。

この三十首はテーマにつきすぎたので、
「断絶の潮」といったものが、一首の發想と
表現を浅くすくいあげているが、「さえずる
や韓国の言葉」をわが知らず誌し来し歌の日本
の言葉」「対島まで行けば朝鮮が見ゆとい
う晴れた日は農家の煙りが見ゆといふ」など、
切ない感動をこめて、余情は深いのである。

(「祖国・朝鮮」)「短歌」(十二月号所載)

世としてはめこまれた和歌とその解釈が一反
かっているのである。

みよし野の峰に枝校るちどりぐさ吹く
山風に揺るるを見れば

磯千鳥沖の荒波かきわけて船頭いとほし
ともしび濡るる

こうした辭世の歌に対して、これらの歌の大
部分は、いずれも「揺るる」および「濡る
る」の序で「揺るる」は国が動乱すること
を意味するもので、歌の大意は「なんと國家

に対するパロディにもなり得るものである
う。しかも末尾にいたって、作中の「私」が
作った辭世が、万葉の防人の歌と、芭蕉の句
であったという部分は、昨年の歌壇で一才問
題になった「模倣」の問題にもつながるもの
で、苦笑いの種は、なかなか尽きぬのであ
る。

武川忠一

深沢七郎の文学は中世の説話文学の流れを
なかなか面白く生かしている。かつての『極
山節考』に利用された姥捨伝説だけではなく、
それ以後の作品の方法や文体などにも、意識
した生かされ方をしている。「東北の神武た
ち」でもそうだが、今度の『風流夢譚』の
「私が変だと思ふのは——どうしたことだろ
う」という個所のリフレインも、説話文学に
はよく用いられる手法で、口で話す要素を伝
えているものだ。説話文学の一つの積極的意
味には、この口で語るという「世間話を基
盤」にしている世界から遊離しないこと、つ
まり、民話的・庶民的な要因を数えることが
できるところにあるのはいままらいう必要も
ないであろう。

深沢はこの方法を意識化におく。意識され

た「民話」として、説話的稚拙さを逆手にとって最大限に利用し、そこに奇妙な独特な現代の「民話」を作り上げるのだ。山本君のいう「型」はこのようにして成立した。だから『東北の神武たち』のような失敗作―ぼくは失敗作だと思おう―には、その文体やリフレインや場面の「型」としての面白さにとどまり、「民話」の現代性、寓意も主張も様式化のなかに解消してしまうというようになる。さて、話題を呼んだが、『風流夢譚』の短歌とかかわる部分にだけ焦点をあつめよう。深沢自身へあの小説は和歌というものに對する私の抵抗感がつくらせたものだ。短歌の「風流」というものは、オセンチで、全くコッケイなしのものだ。そのため先ず四つ短歌だけを先につくった。これに肉付けするために、つまり和歌をもて遊ぶコッケイを出すためには、村長とか隠居を出すより皇室を出すのが一番だと考えたので……という。風流―和歌―皇室。なるほどこれは明解だ。「和歌」ならばたしかにそうだ。現代「短歌」は……などといまさら問題にする必要もあるまい。累々たる和歌の死かばねも、深沢のこの小説と彼自身の軀軀くらいいは役立つというものだ。そうして「和歌」はこの素

材以前に「風流」として認識され、はじめから明確な「型」として意識されているのだ。彼の文学全体が創り出された「型」への意識を経ているとすれば、彼にとつては「和歌」は素材以前のものだ。そのような意味での「型」として巧みに採用されているに過ぎない。だからぼくには、「和歌」の問題であるよりも、彼自身の和歌に対する認識、あるいは軀軀させている認識の方が興味の対象になる。

葛原 繁

「風流夢譚」は皇室の人権問題として話題を呼んだ。そうした意味で問題作であろう。しかし「短歌」の「今月の問題作」として、これを採りあげることにより意味があるのだろう。これがまず僕の疑問だ。次に成るほどこれは「夢譚」と銘うっているのだが、深沢がここで採りあげようとした問題意識について、革命、皇室、和歌、風流等に対する庶民の側からの皮肉や諷刺を感じはするが、そうした問題提出の前提となる深沢の姿勢となると、僕にはどうもよく掴めない。これは『夢譚』なんだ、「寓話」なんだ

余り真面目に、特に短歌の問題として真面目に「風流夢譚」を採りあげる必要もない、必要性も僕は感じない。

山本氏のいう辞世の「揺るる」や「瀕る」の序になつてゐる長々しい句。それを受けて「つまり、なぞなぞみたいにならばいいですね、和歌は」などの部分は、短歌の問題としては少なくとも正岡子規以前の問題だし、第一深沢が序としてゐるものも（長歌、短歌の分離期のものだし）、「みよし野の峰に」しだるる千鳥くさ吹く山風に」とか「磯千鳥沖の荒波かきわけて船頭いとほし」とも「しび」とかは歌の序とはや、性格の違つて既に意図とか意味の定まった語句で、荒唐無稽の序なのだ。皇太子と皇太子妃のおん歌としてゐる二作の掛け合いの内容にしても、現代と違ひもないのだし、歌自身には掛け合いの調子を孕んでいないのだから、これも深沢の見た「風流の型」で、歌とはかかわりがない。

深沢が型として採り出した「風流」の世界を諷刺することは結構なことだし、そんなものを有難がつて、それに預らうとする世界が

今時ありとすれば、その人達が余程どうかしているに過ぎないのである。

折角問題作として採りあげられたのだから、僕もここまで書いては来たものの、もともと書いて見ようという意欲が湧かない問題だし、僕等の短歌の今の問題とは別種の性格の問題だと思つたので、こゝらで切り上げることにする。

前登 志夫

私がかれを書こうとするとき、今年の宮中歌会始の模様をテレビがうつしてゐた。あの長々しい朗詠が私をゾウツとさせたが、すでにテレビはほかのニュースに変わった。そして、朗詠の声はいつまでも耳にのこる。現代短歌と、あれはなんの関係もないのだ、と書いてみても、なんとなくすっきりしない。しかもそれに参加しているのは、ひとりぎりのグループや階層のものではなく、広汎な市民である。マス・コミの方だと思つたが、近頃、歌会始は広く知られてゐるらしい。田舎にいてもこんな質問は再三ではない。「和歌をやつてはるらしいが、歌会始のあれ、出してみなはれよ。」親切にすすめられる。「とてもあ

きまへんな」と、苦笑する。

短歌ではない、和歌なのだ。和歌ではないとピンとこない人達の多いにおどろく。たいていの校長センセイなど、みな和歌という方だろう。和歌も滑稽だが、現代の暗黒のリアリテイだ、と意気まぐ、なぞなぞみたいな今の短歌と、はたしてどちらがより多く滑稽か、考えてみても損にはなるまい、と、にくまれ口はよそう。和歌でないピンと実感されないのは、それがいわゆる風流・趣味と結びつくからだだろう。深沢七郎が、風流と和歌を、皇室というものへ結びつけた発想は、常識的ではあつても、この着想に興味ぶかいものがある。この小説は読んでいて美におかしかつた。しかしそれだけであつて、深沢七郎の仕事はかなり高く評価し期待している私は、ふざけてやがると思ひ失望した。夢の話にむきになることもあるまいが、いつもの独特な彼の暗示的な手法も生きていないし、だいいち、彼のねらいだったという辞世の和歌も、有機的にモチーフを深めてゐると思えない。

ところで、深沢七郎の作家としての魅力は、説話文学のような「型」の手法をとりな

がら、変に生ま生ましまし現代の実存感を造形してゐるところにある。技術的にはむろん意識的でありながら、無意識的のものをつかみ出してくる。殆ど偶然のうちにみえながら、近代主義の衰弱の前に、それは途方もなく生き生きとする。その秘密は、彼が超時間的感覚で発想している点もあるが、伝統といえども最も土俗的な習慣・制度といったものに深くモチーフが根ざしてゐるからだと思う。そうした彼が、日本の血のいちばんしみついた和歌というものに、何らかの関心をもつのは当然かも知れない。「和歌に對する抵抗云々」は、彼らしい弁明で、もっと本能的な興味だろう。そこで彼は、観念的に分析し、造形できないで、彼のオプゼンはいつものごとく、皇室の首をごろりと提出することになる。

さて、私は現代の短歌は、もっと風流があつていいと思ひ、和歌の領域こそ取り組むに甲斐あるものと、逆説的な思考を絶えずもち続けている。深沢七郎さんよ、あなたももっと和歌を勉強して下さい。われわれの現在と未来のヴィジョンのために。

〔風流夢譚〕中央公論社「十二月号掲載」